



ベ て とし ひろ
辺泥敏弘さん(44)＝釧路市地域おこし協力隊

ーイシオロレ(道東地方のあいさつで「こんにちは」)。
ご出身は東京でしたね。
生まれところは東京都日野市です。今は釧路市の阿寒湖畔に住んでいます。

以前は東京にある、ハルコロというアイヌ料理の店で働いていました。その前は、バーの店長や音楽事務所、古物商、電気工事、劇場管理などいろいろな仕事をしました。そういう事をしながら、だんだん自分の歴史と向き合い始めて、先祖のことを知りたいと思い、釧路に移住しました。

ー今はどういう仕事を？
地域おこし協力隊として、全国各地の地域おこしを応援する仕事です。ほくの場合、釧路市の「イオル再生事業」の活動支援員として働いています。簡単に言うと、アイヌの伝統文化を再生させるために、それを生んだ自然環境も再生するという事です。クチャ(狩小屋)の作り方やサケのとり方、森の

知識を若い人についていく拠点作りをしています。ずっと音楽をやっていたので、阿寒の中学生たちと「GREEN BOU GRINBO」というグループを作って、アイヌ語の曲を作ったりライブ活動をしています。一大切に思っていることはどのようなことでしょうか？

何でも経験・体感して語れるようになりたいですね。10代の頃、尊敬していた人に「人に何かを伝えるには知識よりも自分が体験した時の思いを語る方がずっと説得力がある」と教わりました。ー読者に伝えたいことは？
夢や目標があるのは素晴らしいですが今はない人もあせらないで。毎日を目いっぱい楽しんで、夢中で過ごすうちに見つかるかも。ほくがそうでした。夢は無理に持つものじゃないと思うので、マイペースに楽しんでください。

このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。

■トウレフ
「オオウバユリ」
キウとも呼ばれ、球根にでんぶんが多くふくまれる山菜。根は一枚ずつはがしてうすやたるの中でつぶしアクぬき水がえをくり返すうちに、せんとでんぶんが分かれます。でんぶんは「真っ白な一番粉」少し灰色がかかった二番粉と三番粉に分離します。「一番粉」は薬になり、せんいは丁寧な手順で発

「きみ、これ知ってる？」の意味
酔させて大きなドーナツ型の保存食にするのが特徴的です。穴にひもを通してつるせば保存に便利で、昔は家の中にたくさん干していました。かんそうしたものも削っておかゆに入れたり、団子のようにすれば良いしるの実になります。新鮮な球根はそのまま蒸し焼きにしたり、つぶしたものをフキやイタドリなどのくきに入れたり、薬で包んで焼くのも絶品です。山仕事の良いおやつです。(葛野大喜 札幌大学ウレシパクラブ4年生)

村々を訪ね歩き、見たこともないものを食べさせる不思議な女たち



夢枕に立った女たち。2人はオオウバユリとギョウジャニンニクの女神だった

このお話は、山菜を食べるようになった由来を語ったものです。アイヌ民族の考え方では、山菜には体(草の部分)とたましいがあるといい、体がなくなってもたましいは後に残ります。たましいたちは人間からのお供えやおいのりを受けて神の世界にもどり、また新たな体を持って人間の世界にやってきます。こうして人間から感謝されることで、動植物のたましいはカムイになるといいます。

初めて知る食べ物を、きたない・気味の悪い物と誤解する話はたくさんあります。なべいっぱいのおいしき魚だと思った物がおいしい魚だった、という話もあります。和人の話では、スサノオやツクヨミといった神が、女神の鼻や口やしりから出した食べ物をすすめられておこる話があります。

とても食べられそうにない物が意外にもおいしいという、お話を楽しくするしかけの一つでしょう。

感謝され動植物はカムイに



「ウラシベツの村長どの、私たちは人でも魔物でもない。私はオオウバユリの頭領、こちらはギョウジャニンニクの頭領だ。大昔、コタンカラカムイ(国を作った神)がこの世界を作った時、人間の食糧としていろいろな草木を生やした。中でも私たちは最も大切な食べ物だ。ところが人間たちは食べ方を知らないで、せっかく私たちが生えてもだれにも採られずに散り、たましいだけが神の世界へ帰る。これでは生えるかいがないから、私たちが食べられることを教え、神として祭られたいと思って人間の村を訪ね歩いたが、だれも食べようとしなかった。ここでもダメだったら、仲間たちと神の国へ帰ろうと思っていたが、聡明なあなたのおかげで私たちも神になれる。あなたたちも今よりいっそう幸せになるだろう」と言いました。起きてみると夢らしいのです。妻も同じ夢を見たと言います。

女神たちに礼拝し川辺に行くと、なるほどオオウバユリとギョウジャニンニクが一面に広がっています。それを探って食べ方を人々に教え、ますます豊かになって子や孫にも恵まれました。そしてこの食べ物大切に子孫に語りながら今は年を取ってこの世を去るのです、とウラシベツの村長が語りました。

あやしいお客

のぼりべつ し ほろ べつ はなし
＝登別市幌別の話

(知里真志保「分類アイヌ語辞典 植物編」より)

私はウラシベツの村長として妻と2人で暮らしていました。何不自由ない暮らしをしていると、あるとき変なうわさを聞きました。東の方から、小柄な女が、もつと小さな少女をつれてやって来て、村々の村長の家に来ては「ごめてくれ」と言います。村長がとめてやると、次は「おわんを貸してくれ」と貸してやると、ものかに行つて何やらそこそしているかと思えば、おわんの中に大便をして「さあ食べて」と言つて村長に差し出します。村長がきたながって食べずにいると、おこつて悪口を並べて去るといいます。そして、次の村に現れるというのです。

そのおかしい女が、もう私の村の近くに来ているといっています。私の村だけ素通りすると思えないから、きつとやつて来るのだらうと落ち着かない日々を送っていました。そして、火の女神や家の神や自分の守り神にいのつて、その女たちがもしも良くない者であるなら、私の村に近づけないでくれるように願っていました。妻もその女たちが来ることを心配しているらしく、元気がありませんでした。

そんなある日、家の外にいる犬たちがひどくほえる声が出ます。だれかがわが家を訪ねてきたらしいのです。

妻は戸口へ行つて、うわさに聞いた女たちが来ていると言います。席を整えて中にまねき入れるように言つと、妻は「追い返せばいいのに」とばかりに不満げに掃除をし、女たちを中に入れませんでした。聞いていた通り大変小柄ではありましたが、悪い者には見えすく神々しさを感じられる者たちでした。2人を席に座らせ、私がいさつすると、2人は喜んでいろいろな話を始めました。

2人が話すのは神々のうわさ話ばかりでした。やがて少女が「おわんを貸してください」と言います。おわんをわたすと、うわさ通りに物かげに行つて何かをこっそり、おわんいっぱいに入れていたの知れないドロドロしたものをに入れて持ってきた。それを私に差し出して食べるようにすすめます。

うわさで「大便を食べさせられる」と聞いていたので恐ろしく思いましたが、いやなにおいはしません。むしろおいしそうに感じます。感謝しながら受けとつて食べてみると、なんとも言えないおいしいものでした。妻にもすすめてみると、「一口食べてみて、その味の良いことにおどろいたように食べ続けました。女たちはとてもうれしそうでした。

それから妻が花ごのねごとを作り、みなねむつたと思つたころ、あの女たちが枕元に立つてこつてきました。



女が差し出したものは？
食べてみる、おどろくほくのおこい